

「がん看護特論」の授業概要と看護学生による授業評価

石原 和子¹⁾・志水 友加¹⁾

要旨 本短期大学部看護学科3年次生35名を対象に行った「がん看護特論」の講義の概要と講義の仕方と講義内容に対する看護学生の反応を「講義評価票」¹⁾を用いて検討した。

講義に対する理解の程度は、「がんサバイバーシップ」の概念やがん治療に関する治療理念が学生にとって理解しにくいものであることが分かった。講義内容に関する学生の評価で「分かりやすさ」、「刺激と興味」の評価が高かったものは「がんと生きる患者と家族の交流誌」資料のグループワークによる実践的な学びであった。また、「将来役に立つ」では、「死の医学」、「ストレス・コーピング」理論のVTRによる授業は学生の将来展望へと開かれていた。「講義評価票」は講義担当者に対する学生の迎合的な側面も推測され限界もあるが、評価票を活用することは、学生の理解力の察知と共に講義担当者と学生との双方向的学習を深める意義と授業改善の検討に資することができる。

長崎大学医学部保健学科紀要 16(1): 7-11, 2003

Key Words : がん看護特論, 看護学生, 講義評価票, 授業評価

はじめに

「がん看護特論」は、本短期大学部看護学科3年次生を対象とした2単位の選択科目である。看護基礎教育における「がん看護特論」の授業を包括的に理解するために、「がん疾病の全体像および診断と治療の進歩に伴うがん医療を取り巻く社会環境の変化及びがん看護の専門性と役割について学ぶ」という目的で5つの目標: ①がん患者の心理的特徴を踏まえて、がんの治療や諸症状の苦痛に対する看護を学ぶ。②がん疾患を持ちながらその人らしく生活できるように、セルフヘルプグループ活動やソーシャルサポートについて学ぶ。③緩和ケアの概念を踏まえて、がん患者と家族の緩和ケアについて学ぶ。④がん患者と家族の在宅における看護ケアについて学ぶ。⑤がん医療・看護を取り巻く社会的変化におけるがん看護の専門性とその役割・機能について学ぶ。に沿って授業を展開した。

まず、「がん看護」について興味と関心がもて、分かりやすいものであることが必要であると考え、講義だけでなく、VTR、スライド、文献、患者会のレポート、がん医療サポートチームのパネルディスカッションなどを教材資料として活用した。講義が学生にどのように伝わったか、効果的であったかを知ることはこれからの講義の仕方や講義内容に関する妥当性を高めるために必要なことである。

本研究は、米国のバークレー校で開発され東海大学で授業改善に妥当性が検証された「講義評価票」に基づいて、「がん看護特論」の授業評価の結果を次回の授業計画にフィードバックさせることが目的である。

＜文献レビュー＞

「講義評価票」は、講義の最後に「講義におけるポイントと疑問点」について学生に書かせるものである。これは、カリフォルニア大学バークレー校の物理学の教員が実施しているアイデアで、この講義に関する学生の理解度は5段階評価の4.8であり、このアイデアがすぐれた方法であることが裏付けられている。東海大学ではこの「講義評価票」に授業改善用の評価を加え、東海大学式「講義評価票」を開発し、教員が自由に利用できるシステムになっている。東海大学式「講義評価票」は、設問1～5となっており、問1は「今日の講義におけるポイントと疑問点について書きなさい」となっている。この内容によりその日の学生の理解の程度などを把握するものである。ただし、この欄における学生の記述内容から分かることは「教師がその日の授業で意図した事柄」を「学生がどの程度正確に把握したか」と、「学生がどのような点に関心を持ち、疑問を持っているか」である。問2以下では授業改善用の授業評価を行うようになっている。問2は講義を評価する前に学生としての授業態度はどうであったかの自己反省を目的とした質問「今日の授業におけるあなたの授業態度の自己評価(10点法)」である。問3は問1の回答がどの程度講義全体を理解した上での回答か、またクラス全体としてどの程度理解しているかを知るための質問「今日の講義におけるあなたの理解の程度(10点法)」である。問4では授業改善のために10項目(うち1つは自由設定項目)について良いか、悪いかをマークするようになっている。問5は「今日の講義に対する総合評価(10点法)」である。

この「講義評価票」を使用した教員が、すぐれている

1 長崎大学医学部保健学科 看護学専攻

と感じている点は下記のようなものである。

- ・その都度、授業改善を行うことが可能である。
- ・評価の仕方のわからない学生に評価の仕方を指導することが可能である。また、評価項目の意味するところが理解できない学生にも指導が可能である。
- ・評価を伴うので、毎回の授業に緊張感をもって臨むことができる。
- ・問1の内容を読むことにより、学生の理解度や疑問点を知ることができ、学生との対話ができるようになる。
- ・学生の疑問な点を翌週の講義のはじめに再び説明することにより、理解できるように指導することができる。
- ・最初、学生の疑問な点は授業および教科書の範囲内であるが、学生との対話が進むにつれて、講義と関連のある日常生活の中の事柄に関する質問をしてくるようになった。
- ・学生自身の質問事項が取り上げられることにより、学生は教員に「講義評価票」を読んでもらっているという信頼をもつ。これがきっかけとなり、学生の科目に対する興味、さらに勉学意欲の高まりが感じられた。
- ・学生も教員も毎回評価するために学生の方にも緊張感が生まれ、授業に真剣に取り組む姿勢がみられた。
(東海大学式「講義評価票」の概要と利点、P127-130, 1995)

1. 対象と方法

1. 対象

対象は、「がん看護特論」を選択した看護学科3年次生35名である。平成13年9月6日から平成13年12月20日の期間である。

2. 講義の概要と倫理的配慮

講義の概要は<表-1>に示す通りである。倫理的配慮として学生にはオリエンテーション時に「講義評価票」の目的を説明し学生の納得・承諾を得た。

<表-1> 【講義の概要】

回	講義項目	授業展開
第1回	がん診断・治療の進歩	資料配布・VTR・レポート作成
第2回	がん治療に伴う看護	資料配布・講義
第3回	がん治療に伴う看護	資料配布・文献・講義
第4回	がんと共に生きることへの支援	資料配布・講義・スライド
第5回	がんと共に生きることへの支援	患者会会報レポート・VTR
第6回	在宅がん看護の概念と援助の基本	資料配布・講義・文献
第7回	在宅がん患者と家族への支援	グループワーク・レポート作成
第8回	がん患者と家族への緩和ケア	VTR・レポート作成
第9回	がん看護学の発展と専門性について	資料配布・講義・文献

3. 方法

1) 講義評価方法について

毎回の授業に際して、学生に講義終了約10分前に<表-2>に示す「講義評価票」を記入してもらって全課程終了後に集計した。「講義評価票」問1の《本日の講義のポイントと疑問点について書いてください。》に関しては、講義に対する疑問点に対して2回目の講義の時に補足説明したり必要資料を配布して受講生に応えた。なお、「講義評価票」は文献¹⁾²⁾を参考に若干の表現法を修正し作成した。

<表-2> 【講義評価票】

科目：がん看護特論	実施日： 月 日
	学籍番号 []
問1)《本日の講義のポイント、疑問点について書いてください。》(10点法) ①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩ ←悪い 良好い→	
問2)《本日の講義の授業態度の自己評価》(10点法) ①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩ ←悪い 良好い→	
問3)《本日の講義の理解の程度》(10点法) ①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩ ←悪い 良好い→	
問4) 下記の評価項目のうち「悪い」、「普通」、「良い」にチェック(レ)してください。 ①. 話しは聞き易いか 「 」, 「 」, 「 」 ②. 熱意を感じるか 「 」, 「 」, 「 」 ③. 学生との壁を感じさせないか 「 」, 「 」, 「 」 ④. 講義の質の良さ 「 」, 「 」, 「 」 ⑤. 講義の量は適当か 「 」, 「 」, 「 」 ⑥. 講義の分かり良さ 「 」, 「 」, 「 」 ⑦. 講義の将来的役立ち 「 」, 「 」, 「 」 ⑧. 講義の触発性・興味深さ 「 」, 「 」, 「 」 ⑨. 教材の使い方は良いか 「 」, 「 」, 「 」	
問5)《本日の講義に対する総合評価》(10点法) ①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩ ←悪い 良好い→	

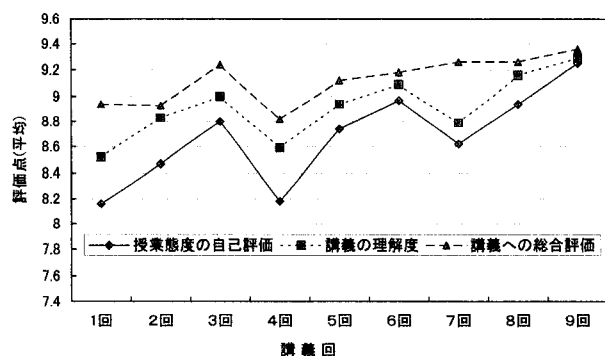
2) 評価点の算出法について

「講義評価票」の問2・問3・問5の3つの項目は10点法により評点を算出した。問4の9項目については、「良い」を3点、「普通」を2点、「悪い」を1点として換算し評点を算出した。しかし、今回は、疑問点に関する補足説明については言及していない。

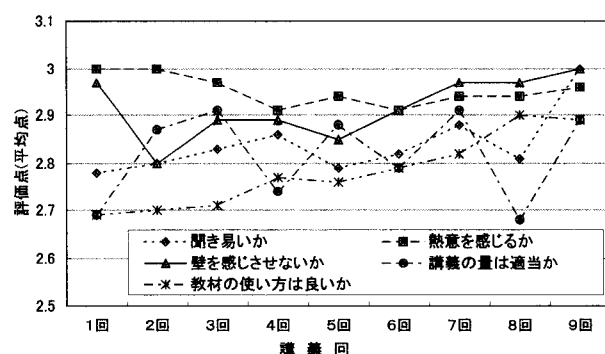
II. 結果

1. 講義評価に関して

問2)は《学生自身の授業態度の評価》であり、評価する前提としての授業態度を振り返ってもらう項目である。問3)は《講義の理解の程度》であり、講義をどの程度理解しているかを確認するものである。問5)は《講義に対する総合評価》であり、講義全体を総合的に評価するための項目である。問2), 問3), 問5)は10点法とし講義毎に1点から10点までの評点の平均値を示したものである。総合評価は授業の進行に沿って高くなっていく。講義の理解の程度も講義が進むにつれて高くなっていく<図-1>。



<図-1> 学生による授業評価



<図-2> 講義の仕方に関する学生の評価

2. 講義改善のための評価について

1) 講義の仕方に関する評価

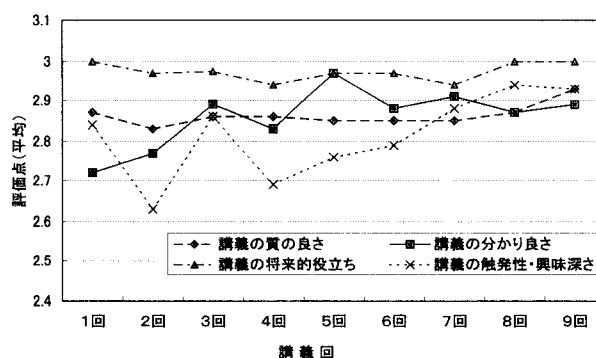
講義の仕方に関する評価は、「話し方」について《話し易いか》、「熱意」について《熱意を感じるか》、「学生との関係」について《壁を感じさせないか》、「講義の量」について《講義の量は適当か》、「教材の使い方」について《教材の使い方は良いか》の5項目についての結果を示している。

講義の仕方に関する項目で、「熱意」、「学生との関係」については学生の評価は高かったが、「教材の使い方」、「講義の量」については学生の評価は低くなっている<図-2>。

2) 講義の内容に関する評価について

講義の内容に関する評価は、「講義の質」は、《講義の質はよいか》、「分かりやすさ」は、《講義は分かり良いか》、「将来役に立つ」は、《講義は将来的に役立つと思うか》、「刺激と興味」は、《講義の触発性と興味深さ》の4項目についての結果を示している。

講義の内容に関する評価項目で、「将来役に立つ」は、講義回数が進むに従って評価は高くなっていったが「分かりやすさ」、「刺激と興味」の項目については講義テーマによって学生の評価にばらつきが見られる。また、「講義の質」に関しては第1回から第9回まで学生の評価は、ほぼ一定している<図-3>。



<図-3> 講義内容に関する学生の評価

III. 考察

1. 講義態度の自己評価、講義の理解の程度、講義に対する総合評価に関して

第2回目の講義で理解の程度は横ばいとなっている。このことは資料に沿った講義によるもので、がん治療における手術療法、化学療法、放射線療法に関するそれぞれの治療理念に関する理解の程度が推測される。また、第4回目の「がんと共に生きることへの支援」に関する講義で、がんサバイバーシップ (Cancer survivorship) の概念やがん告知後の患者や家族の教育・サポートプログラム「がんを知って歩む会 (I can cope)」のスライドを用いた授業を展開した。「がん=死」という図式を払拭できないという学生のレポートからも分かることであるが、学生は実際にがんを持って生きている人々との関わりを持った経験がないため、率直に理解することができなかったものと推測される。しかし、5回目では、患者会会報レポートを読み進めていく過程で、がんを超えて自分の生きている意味を見だし死が訪れるまで前向きに生きるがん患者の生き方に学生は感動を覚えている。その結果として総合評価を高めていると思われる。

9回目の講義態度の自己評価が高いのは、学生にとっては自分の将来像に思いを巡らせる時期でもあり、専門

看護師、認定看護師制度に関する具体的な質問があったことで、講義態度の自己評価が高いものと推測される。そして、第9回目「がん看護学の発展と専門性」の授業は、「講義態度の自己評価」、「講義の理解の程度」、「講義に対する総合評価」の3項目ともに評価が高く、学習の積み重ねによる影響も考え合わせて学生の関心が高いことが推測される。

2. 講義改善のための評価について

講義の仕方に関する5項目の評価で、「教材の使い方」、「講義の量」に関する項目に対して学生の評価は低く示されている。VTR、自作資料、スライド活用による授業展開であったが結果として、学生は講義に興味を持てなかったことが示されている。このことは、VTR教材の視聴後にレポートを課したことが学生にとって負担感になったと推測される。

しかし、第1回目と第8回目のVTR教材による授業は「講義は将来的に役に立つと思う」項目の評価は学生全員が高く評価している。第1回目のVTRは、がん専門病院の「がん制圧」に取り組んでいる「がん診断と治療の進歩」というテーマでがん本態の研究・がん診断・がん治療の進歩と医療にQOLを導入した緩和ケア病棟(PCU)のケア状況を映したものである。咳嗽と疼痛コントロールのために一人の肺がん患者が緩和ケア病棟(PCU)に入院して医師や看護師との対話や日々の療養状況と咳と疼痛が緩和されて娘の家庭へ退院していく風景が映しだされたものである。第8回目のVTRは、「輝け命の日々よ」のテーマで、精神神経科医の西川喜作氏が遺した膨大な日記と手記、対話テープをもとに、作家柳田邦男氏がカメラに語りかけながら「死の医学」を問いかけるものである。

『どれだけ長く生きられるかではなく、その人が生をどのように充実させたかが大切である。死を考えるということは生を考えるという事である。死から逃げるのではなく、向き合うことが大切である。』と学生の「講義評価票」に述べられていた。また、緩和ケア病棟かホスピスで働きたいという将来への展望を述べている学生もいた。

学生は、「死の医学」、「ストレス・コーピング」理論についてVTRを通して深く学んでいた。

一方、講義の内容に関する4項目の評価で、「分かりやすさ」、「刺激と興味」の項目について学生の評価が低いのは、第2回目の講義による「がん治療に伴う看護」であった。

「分かりやすさ」、「刺激と興味」の評価が高いのは、第7回目の「がんと生きる患者と家族の交流誌」資料によるグループワーク授業であった。『患者は一人ではがんと向き合うのではない。自分の体験や思いを互いに語り合うことで、自分自身をそして周りをも精神的に解き放たれる。体験者の話はどんな観念的な理論に勝るとも劣らない。』と学生の「講義評価票」に述べられていた。

3. 講義評価票の限界と意義について

学生の「講義評価票」の記述した内容によって学生の

理解内容を察知できることや評点による客観的・相対的に講義の仕方や内容による理解レベルを検討できるということが今回の「講義評価票」の活用によって分かった。第1回目のオリエンテーションで、がん看護学特論の授業計画のフィードバックの目的で「講義評価票」を記入してもらうことを説明し学生に承諾を得た。この「講義評価票」には、無記名とし学籍番号のみを記入させた。しかし、無記名といえども講義担当者に対する遠慮や迎合的要素が含まれていることが考えられる。例えば、『がん看護を楽しくそして興味深く学ばせていただいたと思います。たくさんのことをこの特論の中で学ぶことができました。4月から看護師になってたくさんのがん患者さんと会うと思いますがその患者さんからたくさんのことを学び、よりよい看護が提供できるように日々成長していきたいです。〇〇先生から学んだこと、ずっと胸にとめておきたいと思います。』などの記述は「講義評価票」による評価の限界と言えるだろう。しかし、学生の評価は学生との対話を図る貴重な資料となり講義担当者にとって謙虚に反省させられる面とこれからの授業計画の改善点が明らかになったことは意義があった。

IV. 結 論

「がん看護特論」を選択した看護学科3年次生35名に対して「がん看護特論」の講義内容や講義の仕方および「講義評価票」の意義について検討した。

1. 「講義評価票」を活用することで、講義内容と学生の理解レベルを推測できる。
2. 学籍番号の記入により、講義担当者に対して遠慮や迎合的な傾向も推測され「講義評価票」の限界もある。
3. 「講義評価票」は、講義担当者と学生の双方向学びを深め、より効果的な教育のための授業改善に活用することができる。
4. 講義を受講する学生にとっても自分自身を振り返る記述があり学生の洞察力を養うものと思われる。
5. 今後は、教材研究と講義の仕方を再考し、より適切で効果的な授業展開を図っていきたい。学生にも理解しやすく実践的に確認することができたので、「講義評価票」を特論以外の授業にも活用し、継続して授業評価の妥当性と信頼性についても再検討をしたい。

引用・参考文献

- 1) B.G.Davis, L.Wood, and R. Wilson: ABC's of Teaching with Excellence, University of California, 1983, 香取草之助(監訳), 授業をどうする!—カリフォルニア大学バークレイ校の授業改善のためのアイデア集—, 東海大学出版会, 1995.
- 2) 村上昭史:看護学科におけるカウンセリング教育と学生による授業評価, 香川医科大学看護学雑誌, 5(1): 159-165, 2001.

The outline of lectures on “Cancer Nursing” and Lecture evaluation by nursing students.

Kazuko Ishihara¹⁾, Yuka Shimizu¹⁾

1 Department of Nursing, School of Health Sciences, Nagasaki University

Abstract The outline of the lectures of “Cancer Nursing” given to 35 third-year students at the Department of Nursing of our junior college, the manner in which the lectures were conducted, and the contents of the lectures were evaluated according to the responses of the students observed in their entries in “Lecture Evaluation Slips”. Concerning the students’ understanding of the lectures, the concept of “cancer survivorship” and theories of treating cancer were found to be difficult for the students to understand. As for the contents of the lectures, the scores of “clearness” and “stimulation and interest” were high in the practical learning by Group work using “the Journal of Patients Who Live with Cancer and their Families” as the material. The score of “useful for the future” was high in the lectures on “thanatology” and “stress coping” using VTR materials. The “Lecture Evaluation Slips” have limitations as their entries suggest a deference of the students to the lecturers, but they contribute to monitoring of the understanding of the students, promoting bilateral learning between the lecturers and students, and improving the contents and efficiency of classes.

Bull. Nagasaki Univ. Sch. Health Sci. 16(1): 7-11, 2003

Key Words : Cancer nursing, Nursing students, Lecture evaluation slips, Evaluation of classes